



今月の『一読あれ』
読ん de 知っとこ！ ～障害者理解と共生のために～

12月に入り、今年も残すところわずかとなりました。さて今月は、広島市域公共図書館15館・大学図書館17館協働イベントとして、「障害の理解」をテーマに10冊の本を紹介します。この本を通して障害について、より理解が深まるとうれしいです。読みやすい本を選んで紹介していますので、ぜひ手に取ってみてください。

『跳びはねる思考』 東田直樹著 914.6/H55 2F和図書B
 会話のできない自閉症の著者が伝えたかったことは・・・障害があるから不幸ではない、自閉症だから普通の人にはない感性がある。



『わが盲想』 モハメド・オマル・アブディン著 916/A11 2F和図書B
 アフリカのスーダンから来日した著者が、目が見えないことを通して感じる日本という国。その「盲想」の世界やいかに。



『ぼくには数字が風景に見える』 ダニエル・タメット著 936/Ta81 2F和図書B
 アスペルガー症候群と、特定分野に優れた能力を発揮するサヴァン症候群をあわせ持つ著者が、自分の頭と心の中を描いた手記。

『全盲先生、泣いて笑っていっぱい生きる』 新井淑則著 916/A62 2F和図書B
 34歳で全盲になった彼がどのようにして暗闇から一歩踏み出し、希望の扉を開き、再び教師として教壇に立ったのか。人との出会いの大切さ、家族愛を感じさせる話です。

『今日の風、なに色？』 辻井いつ子著 762.1/Ts42 2F和図書B
 全盲のピアニスト・辻井伸行さんの母いつ子さんによる親子の成長の記録。

『アスペルガー症候群のおともだち』 内山登紀夫他著 378/H43/2 2F和図書A
 アスペルガー症候群があるおともだちの行動を通して、具体的にどんな障害なのかを紹介しています。

『たったひとつのたからもの』 加藤浩美著 916/Ka86 2F和図書B
 生まれてすぐダウン症、心臓障害と診断され、最愛の息子と過ごした大切な六年三ヶ月。病気と戦いながら精一杯生きた息子・秋雪の成長記録。



『ぼくが発達障害だからできたこと』 市川拓司著 916/I14 2F小型本
 発達障害のぼくは、なぜ社会からはみ出してしまうのか。小説『いま、会いにゆきます』の著者が、小説的にひも解きます。

『ようこそ、障害者スポーツへ』 伊藤数子著 780/189 2F和図書B
 車いすテニス、義足ランナーなど、パラリンピックをめざすアスリートたちの姿を通して、障害者スポーツの深い魅力にせまります。



『耳の聞こえないお医者さん、今日も大忙し』 フィリップ・ザソウ著 936/Z1 2F和図書B
 聴覚障害のある著者が医師となり、日々働く姿をいきいきと描いています。

3F中央ホールで展示中！
貸出できます